

# 米とかあちやん粗末にするとバチかぶる

## 若月流ケンカで養生園は残った

公立菊池養生園診療所名誉園長

竹熊宜孝



ただいまご紹介いただきま  
した、竹熊といます。有機  
農業の米で作った球磨焼酎を、  
熊本から下げてきました。今  
日の懇親会で、若月先生の写  
真の前に飾って、そこで先生  
方にちよちよとなめてもらう  
ことにしたいと思います。本  
当は「先生、熊本から焼酎ば  
持って来ましたばい」と言い  
たかったんですけれどね。

### 若月先生の心配り

私、会場をちらっと回って

きたら、「若月俊一から何を  
学ぶか」という本があり、「こ  
れ読んでおらん」と思い1  
000円ですぐ買いました。  
これは私の息子と孫にやりま  
す。というのは息子も孫もこ  
こに来たんですよ。そして若  
月先生から本にサインを入れ  
ていただいた。竹熊与志と言  
うんですが、その息子へ「竹  
熊与志学兄」と、普通は偉い  
人に「学兄」と書くんですが  
ウチの息子に学兄と書いてく  
れました。それで息子は若月

病にかかりまして、今熊本の  
地域医療で何とかがんばって  
います。先生は必ず本にサイ  
ンを入れてくれる。そういう  
心配りが大事なんです。  
このごろ医学教育のいろん  
な先生方がいらっしゃるが、  
「医学概論」というのが非常  
に難しい。何を語り、何を伝  
えるかというのは、すごく大  
事なことなんです。今は技術  
的なことが先で、心を伝える  
ことがなくなっているんです。

そこで育つ医者には病気を治す  
んではなくて、病気を見つけ  
る診断のほうに一生懸命です。  
治らないと、「医学の限界だ」  
と言っておけばいいわけです。  
見つけないと藪医者と言われ  
ます。私は、逆に見つけない、  
「病気になる人が一番よかば  
い、見つけんでもよかろうが」  
と言って、それで養生という  
名前を使うようになったんで  
す。どうせ人間1回は死なな  
ければいけないから、死ぬと  
きは痛くないように死にたい。



毎週金曜日に開かれている「いのち」「環境」「医・食・農」などをテーマにした養生説法

でも、楽しく人生はすごした  
ほうがいいと思います。

### 若月先生との出会い

今日まで、田舎の診療所で

35〜6年やっています。私が  
若月先生と出会ったのは、イ  
ンターンのときです。東京に  
立川共済病院というところが  
あります。そこで1年間勉強

したときに若月先生のことを  
聞いたんです。私は、どがん  
病院じゃろかと思って、佐久  
にこっさり来て、病院だけ見  
て帰ったんです。それが私の  
運命だったと思うんです。

それで私は熊本に帰りまし  
て、若月先生を熊本にお招き  
して、農村医学研究会を作り、  
またいろんなことをやりまし  
た。私はなぜ医者になったか  
という、ひとつは弟が、田  
舎で農薬のホリドール中毒に  
なって、それがきっかけで医  
学の道に入った。それと、医  
者になる前に私、患者になっ  
たんです。黄疸が出て、すぐ  
に入院して、高たんぱく、高  
カロリーの点滴を1日2本ず  
つうって、20<sup>+</sup>太ったんです。  
そうして糖尿病が出てしまし  
て、蕁麻疹が出て、高脂血症  
で絶対安静になってしまった。  
自分が患者になったことで初  
めて、そういう医療はしたく  
ないと思えました。あと5年  
で死ぬと言われたんです。

死ぬ前に1回東京を見て帰

りたいと、それで立川共済病  
院を希望して、そこをかみさ  
んと出会った。死んでたまる  
かということ、いかにした  
ら死ななかっていう研究に入  
ったわけです。10日間の断食  
もしました。玄米食もしてみ  
たり、いろいろやったら、病  
気が起こらなくなりまして、  
それから何十年にもなります  
が、病院を休んだことないで  
すよ。医学でこういうことを  
誰も教えないですよ。医学  
の方向性を、もう一度考えな  
おさなければいけない時代が  
来たんじゃないかと思っています。

### 沖縄での仕事

私は大病院で14年間いろ  
いろ研究もしました。それが  
きっかけで遺伝性血液疾患を  
見つけたんです。その調査の  
ために沖縄に行きました。そ  
こでまたいろんな検査をして  
いましたら、えらい大変な病  
気だなというのが分かりまし

## 竹熊宜孝先生プロフィール

公立菊池養生園診療所 名誉園長

**【略 歴】**

昭和9年 山鹿市生まれ

昭和35年 熊本大学医学部卒業

昭和36年 東京都立川共済病院

インターン

昭和40年 熊本大学大学院医学

研究科卒業、医学博

士

昭和41年 琉球政府立中部病院

勤務

昭和44年 熊本大学医学部勤務

昭和48年 熊本大学医学部付属病院講師

昭和50年 公立菊池養生園診療所所長

平成元年 福岡大学医学部非常勤講師

平成5年 佐賀医科大学看護学科・医学科非常勤講師

平成12年 公立菊池養生園診療所名誉園長

平成16年 九州農政局食育委員

**【受 賞】**

第59回 西日本文化賞

第53回 熊日賞

平成21年度 熊本県近代文化功労者賞 ほか

**【著書・出版】**

「土からの医療」 「土からの教育」

「飯と聴診器」 「田舎一揆」 ほか



て、沖縄に家族で移住しました。ハブのいる中を一軒一軒訪ねて、世界では一番多くその症例を発見しました。私の仕事の一つになったんです。

沖縄中部病院というのがありますが、アメリカのシステムで勉強する研修病院として、日本で最も有名な病院になりました。ものすごく鍛えられます。トイレと寝るとき以外は仕事。その研修システムには、アメリカのハーバード大学を出た先生たちが来て訓練していくわけです。そのと

きに、日本は20年遅れていると思いましたが。日本の臨床教育は、これではいかんなど思っている病院を見習わなくてはと思つて、若月先生に言つたら、「あそこはいいんだ。君あそこにおつたんか。よかったな。うちもそういうこと今やっているからな」と言つてました。そのときに私は、大学の研究をやめようと思つたんです。

熊本にはそういうところは、なかったんです。そういう医療機関を作らなにかんと思

いました。交通事故にあつても、翌日大学病院に送れという状態でしたけど、今は24時間オープンな病院があります。沖縄中部病院に行つたスタッフがけっこうおりました、頑張っているわけです。

その病院を作るときに若月先生からいろいろ示唆をいただきましたが、そのときに反対があつたんです。「なんか変な病院作ろうとしているぞ」という噂が広がりました。誰が噂の仕掛け人か分からなかつたんです。熊本県で一番政治的にも経済的にも大変な方で、全国町村会長を8期した河津寅雄という方がいます。その方が、最初に「お医者さんというのは立派で頭のいい方がおるけども、心が問題ですよ」と言われたんです。「患者の身になつて一生懸命やってくれるような人が集まるんだつたら、私がお金を持ってきます。そして知事にそれを

作らせます」と言つてできたのが熊本日赤病院です。

### キーマンとの出会い

ちょうどそのころ有吉和子さんが「複合汚染」を書いていまして、そのとき私は熊本で、「いのちと土を守る大会」を開いてまして、そこに有吉さんに来ていただいたんです。そのとき有吉さんが、「熊本で一番の政治的ボスは、だれ」と聞かれた。「それは、河津さんでしょうね」と言うのと、「その方に会いたい」と言うんです。「急に言われてもこの方簡単には会えないです。1週間前に約束してもむづかしい」、「だから会うんだよ」と言われたから、私はそれから2時間ぐらいかかってどこにおられるか探しましたが、どうとう見つからなかつたんです。そうしたら、翌朝会場で電話がかかってきました。「有吉先生はおられますか」と。どこか聞いたよう

な人だ。「何か御用でしようか」「いや私を探しておられたようなので・・・」と、河津さんが直接電話に出られた。

「有吉でございます。お忙しい方に大変失礼なことですが、竹熊先生たちがやる運動を絶対つぶさないでください。有機農業の運動、救急医療のこと、これは絶対大事なことから、守ってやってください」と有吉さんが言いました。そうしたら「承知いたしました」と言われたんです。その一声で熊本に有機農業のノロシがあたり、そうして病院ができたんです。

そういうキーマンがおられるわけです。若月先生もそれだと思えます。私もいい先生と、政治的にはボスといわれた人に、医療そして農業を理解していただいた。

### 農業研究会

その頃、有吉さんが、「あと30年したら、若い人は結婚

しなくなるよ。しても子どもができなくなるよ」と言っていました。まさかと思いましたが現実にとおりになっております。これは大きな問題なのです。少子化と言ってるが、子種がなくなっているよ、ということ。これは動物学的に大変な問題です。人間がどんどんどんどん減っていく、このことを医学はどのくらい真剣に考えているか。その専門の方はいらっしゃるか分かりませんが、若月先生もそのことをおっしゃいました。「これなんだよ。僕が農村医学会でね、農業問題を扱っているのは、このためだよ」と盛んに言われました。

農業研究会という会があります。薬とユーモアの研究みたいなので「先生、ノー毒薬研究会としてくれんですか」と私が手を上げて言ったら「熊さん、そのとおりだ」と若月先生が言われました。農業は本当は毒薬なんですよ。

ちゃんとテストされている毒薬ですから、英語で *cultural medicine* といふかされる。それで、ある会で「農業は大丈夫です。安全です」と言われたから、ビックリして、その会場で手を上げたんです。そうしたら、「時間がありませんから」と切られちゃったんです。私は、「1分でもいいから時間を貸しなさい」と言ったんです。「安全」というけど、あなたはそれをなめたことあるの」と大学の偉い先生に。「あれはなめるものではないですよ」、

「薬は飲むものだから、副作用があったらダメだけど、農業はなめるものではないから大丈夫」と。「そう言われますけど、食べるものにかけているじゃないの、お茶にも米にもかかってるじゃないの、あなた何勘違いして

るの」と私は言いました。大

### 口蹄疫に向かう

#### 食生活

宮崎の口蹄疫、あれは牛やヤギや豚の話で、人間は関係



保育所で「いのち」を子供たちに教える（昭和50年頃）

ないように思えるかもしれないけど、人間も同じような方向に行っているんです。マスコミも農学者も言わない。非常に大きな問題です。今若月先生がおられたら、「そうだよ、熊さん」と言われると思うんです。体が弱ってきたら、皆ウイルスに巻き込まれていきますよ。体が弱るような食生活なんです。私は最近まで、牛もヤギも鶏も馬も飼っていたんです。野草を食わせているときはぜんぜん病気がなかった。牛が食う草をもらって馬に食わせたら、馬が肥満になって、そしてついに去年の4月16日に亡くなりました。びっくりしました。そうしたらある獣医さんが「竹熊さん、あなたは牛のえさを馬に与えたら。あなたは人には玄米がいいとか、砂糖は食うなどと言って、自分の馬にはご馳走ば食わしたろう。家畜はごちそうを食わしたらダメになる。今の若い獣医は、専門

家というて、牛のことは知っていても、馬のことは知らん」と言うんです。その方82、3歳になられているんですが、そういう年寄りの知恵というのは、非常に大事ですね。今度の口蹄疫ですね、考えてみてください。放牧してないでしょ、そしてコンクリートの上でしょ。うんと食え食えと言って、よそよりも早く太らせて、高いつき売れという仕組みができてきた。そして飼料もいかに早く太るかという飼料になっていった。北海道の佐呂間というところの町長さんが獣医さんだった。「先生、私は獣医ばつてん、獣医で飯食われんとですわ。放牧しておるから、牛がぜんぜん病気がない。乳房炎にもならん。獣医で食われんけん、町長になったですわたい」。町



佐久病院で若月先生と

長になって一時たつてから、なんか獣医が忙しがっている。「何しよった？」と言ったら、「牛が乳房炎とか、逆子になつている」と。飼料が変わつていたんです。雑草のときには10種類以上の野草が入っていた。それが3種類になった。とたんに乳量が3倍から4倍に増える。そして霜降り肉になり、高う売れる。皆さんどうですか、昔みた

いに朝から漬物と味噌汁、そういう人少なくなりました。やっぱりたまにはパンを食べる。フランス料理、イタリア料理も食べる。日本人は小さいから、大きくしないとサッカーも柔道も負けると言うて、大きくすることを目指して今日まで生きています。お隣の韓国、サッカーも野球も強い。私、韓国との交流があまりまして、20年ぐらい前から行ったりは朝、昼、晩、米です。そのことは、日本の栄養学者はあまりご存知ないと思います。日本の食文化が、どんと変わってきました。そのために農業が変わるざるをえない。農業が変わるといことは、病気が変わってきたということです。

### 日本の農業が危ない

30年ぐらい前、東京で、朝日新聞主催の日本の農業についてのシンポジウムがあった。



竹熊先生と愛馬「デン」

そのときに、アメリカやインドや東南アジアの新聞社の有名な人が来ておられた。そのとき日本は、後で総理になられた羽田さんが農水大臣でした。来ている人の8割くらいが黒いスーツにネクタイ。女性にはほんの少しで、農家らしい人はほとんどみえていなかった。日本の農業どうするかというシンポジウムのように、

農家の人が来ておらん。どういふことかと思つて座つておりました。そうしたらアメリカの人が「日本はもう農業なんかやめなさい。こんな狭い国土、全部レジャーランドにしなさい。そしてゴルフしたら経済活性化になる」と言うのです。そう言つたとたんに、皆拍手しました。びっくりしました。皆1500円でチケット買って来ているんです。「ははあ、これは企業が皆買つて『お前に行け、勉強に行け』と来たんかな」と私は邪推したんです。これは困つたもんだなと思ひました。日本の農場をつぶすために、世の中ほとんど変わつていふなと思つたんです。農家の人口が減つてきて、「大型機械でやりなさい、もう米作らんでよかば

い」と言つて「酪農に、果実にいく」というように、いろんなことが起こっているのです。

### 養生園の始まり

わたしは田舎のつぶれて医者もいなくなった診療所に行つたんです。そうしましたら、町議会の議員さんが、「どうせ医者というのは1、2年おつて、人気とつて、可愛い看護婦を連れていって、病院の横で開業する。そうすると患者も取られて、また赤字たい。先生には失礼ばつてんが、私は反対するもんな」とこう言われしました。そこで、私が「せっかく来ましたけん、ご挨拶かたがた、一言発言よかですか」、「どうぞどうぞ」。その議員さんに「おたくの命はいくらぐらいの値段しますか?」と聞きました。「おれの命がいくらかと? 妙なことを聞くな」、「豚の値段はだいたい4万円ぐらいですばい。

乳のどんとでてる牛が100万円ぐらいとかかかっている。おたくなら、1000万円くらい、なんて言うて怒るでしょ?」、「1000万円どころか、1億だつておれの命はやられん」、「でしよ。そういうことで、病気になるんような病院ば作りたと思つて、私は頑張ろうと思つていふ。給料いくらくれとか、いろんなこと言うたためしはなかすばい」と言つと、その議員さん顔が真っ青になつて汗を流しながら、「議長、今の発言中止する」。そして議事進行となつて、パチパチと決まつたんです。病院を作るときの条件は、2つ出したんです。「養生園」と言う名前と、畑を5反貸してくださといつたんです。それが養生園の始まりです。

やっぱし最初が肝心ですね。自分の給料ゆうとけばよかつたんですが、同級生に聞いたら、「俺の半分だよ」と、し



よつと演劇が好きなんです。そういうことで、ずるといふことも大事なんです。しかしそういうことは地域医療で誰も教えない。大学病院では、健診の仕方、読影の仕方は教えるけど。これは地域医療では非常に大事なことです。私はおじいちゃん、おばあちゃんを集めて説教するのはなく、知恵を盗むんですよ。知恵というのは、失敗しているから知恵になるんですよ。そういう知恵を大事にしながら今日まで生きています。道の駅のようなことを始めました。曲がった大根、曲がったにんじんも出してあります。そうしたら「先生は拾ってきて売り出したばい」と言われました。でも自分で作ったものは、いとおいしいです。だから売りに出すんですよ。私は5反ぐらいの畑を一生懸命作りましたから、捨てたくないんですよ。訳ありということでは値段は引いて。息子に

も田植えをさせました。こういうことを1回させると、米がどうして成長していくか、大変だということが、よく分かります。

### 農村医学を守るために

今、日本では農業やりたい人がいない。どうしますか。それに対して文部科学省、農水省はなにもやらない。困っ

たもんですね。政治をなさる人は真剣に考えてもらわないと、日本は大変な時代に入ります。世界的に水が汚れ、空気が汚れ、食料が汚れて、海が汚れてくれば、日本も大変なことになりますよ。

口蹄疫になった豚の飼料は、皆外国から来ます。外国から来るたくさん飼料のなかに、遺伝子組み換えもあるし、い

ろんな草の種が入っている。見たこともない草が山ほど出てきます。まさに日本の土は変わってきました。

このことにも農村医学会に目を向けてもらいたいと思って、いつかその話をしたことがあります。そうしたら農協の偉い方がたが、「先生、そのとおりです。先生から声を大きくして言ってください」と言われたから、大きな声で言ったんで

す。そしたら、怒られたんです。怒られたところではなく、私に大変な危害が襲い掛かるうとしたんです。そのとき若月先生が、「よし、やろう。熊さんのむぞ。骨は私が拾う」と言われたんです。これは私は今でも忘れないです。もうそのときは、若月先生は理事長を引いておられました。しかし、同じ医学会でも、命の見える方とそうでない方がいらっしやるなど、私は痛切に感じました。

農村医学というのは、今大変複雑な問題を抱えながら、頑張っておられます。佐久病院が中心でございませうから、今後とも佐久病院の先生方、またそれを支えておられる皆さん方が、日本のお手本になつていただきたいと思います。今日は、こういう私の漫談を話す機会を与えていただきまして、ほんとうにありがとうございます。



子どもたちへの「食農教育」